

AGU 環境人文学フォーラムの発展

Developing the AGU Environmental Humanities Forum

研究代表者 結城正美

YUKI, Masami

本研究プロジェクトは、文学部附置人文科学研究所研究プロジェクトとして 2021 年度に始動した AGU 環境人文学フォーラムの発展を目的とするものである。

環境問題のそもそもの原因は人間のものの考え方や価値観にある。文化、歴史、言語、ジェンダー、人種をはじめとする多様な問題域において、人文学諸分野は意味や価値の問題に取り組んできた。そうした人文学諸分野の研究者が、人間の活動による地球環境の激変とそれに伴う危機的状況への応答を模索し、相互に触発し合いながら蜘蛛の造網のごとく協働する動きが、環境人文学 (environmental humanities) である。

プロジェクト四年目の 2024 年度は、日本文学 (佐藤泉)、英文学 (麻生えりか、伊達直之、トーマス・ダブス、松井優子、松木ほのか)、米文学 (西本あづさ)、米文学・エコクリティシズム (清水美貴、結城正美)、ポストコロニアル文学 (橋本智弘)、サウンドスケープ研究 (鳥越けい子)、言語哲学 (エリン・マクレディ)、現代史・ジェンダー研究 (チェルシー・シーダー) といった多分野を横断する対話の一層の深化を試みた。具体的には、主にオンライン研究会を通して、メンバーが個別に進めている研究を環境という視座からとらえ直し、相互の研究の接点を可視化することにより、環境をめぐる問題を多角的に考察する学術的コミュニティ——AGU 環境人文学フォーラム——の発展を目指した。オンライン研究会は、メンバーだけでなく学内外に開いたオープンな研究会とした。

環境人文学の国際交流にも継続して注力した。2024 年度は、本フォーラムを窓口として本学が参加するノルウェーとアジアの環境人文学国際共同研究 The Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) の最終年度にあたり、とりわけこの共同研究の拠点校であるスタヴァンゲル大学 (ノルウェー) との国際交流で 3 つの大きな進展があった。一つ目として、スタヴァンゲル大学の教員 2 名と大学院生十数名を本学に迎え、環境人文学ワークショップ等を通して相互理解を深めた。二つ目として、教育交流の一環としてスタヴァンゲル大学院生を本学客員研究員として迎え、本フォーラムのオンライン研究会での研究発表や日常的な親交を通して、学術的かつ親密な国際交流を実現した。そして三

つ目は、8月にスタヴァンゲル大学で開催された ANEST クロージング学術会議で、本フォーラムから麻生、ダブス、西本、清水、結城が参加して研究発表を行い、スタヴァンゲル大学の教員および大学院生、国立台湾師範大学をはじめとする ANEST パートナー大学の教員および大学院生と交流し、環境人文学の国際化に向けた個人的および組織的なネットワーキングを行った。ちなみに ANEST は、ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成 International Partnership for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による共同研究で（拠点大学：スタヴァンゲル大学）、ノルウェーの三大学、アジアの六大大学の間で研究教育交流を進めてきた。

以下に、オンライン研究会の発表概要および ANEST に関わる活動等の記録を示し、2024 年度の活動報告とする。なお、オンライントークの番号は、2021 年度からの通し番号である。

Online Talk #21 (April 13 2024)

「乏しき時代において文化と自然の共生を問うための人文学的構図（その1）」

大澤善信（関東学院大学名誉教授）

私の学んできた領域は社会学で、人文学の範疇かそれとも社会科学範疇を立てた方がいいのかというマージナルな位置付けである。その社会学の古典であるマックス・ウェーバーが近代を特徴づけるのに用いた「世界の魔術からの解放」という言葉（シラーのもじり）が有名である。ウェーバーは近代人の性格類型を「心情のない専門人」だといい、ニーチェの言葉で「無（ニヒ）の人」や「末人」とも呼んだが、「魔術から解放された」知性とは、ハイデガーによれば「技術崇拜」が極まったということであった。「人新世」や人間と人間ならざるものという、極めて 21 世紀的な問題圏であるが、1900 年に亡くなったニーチェが自分の死後 200 年はニヒリズムの時代だと述べたように、むしろ前々世紀末から 20 世紀の前半における人間と動物、文化と自然、ゲゼルシャフトとゲマインシャフト等々の問題構制を私自身は意識してしまう。さて、ちょうどその時代の「乏しき時代の詩人」リルケも、詩人がなすべきは大地の「委託」を叶えることだと述べており、同様の問題圏を潜っているものと思われるので、少々閑説しようと考えている。

ANEST Workshop at AGU (20 April 2024)

INTPART プロジェクト The Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) の拠点校であるスタヴァンゲル大学から、Finn Arne Jørgensen 教授、Melina Antonia Buns 准教授、そして環境史を専攻する大学院生十数名を迎え、本学にて環境人文学ワークショップを開催した。

ワークショップに先立ち、本フォーラムメンバーであるチェルシー・シーダー教授がオーガナイザーを務めるジェンダー研究センター展覧会「共創の場：ジェンダー問題とアジアの

アート・コレクティブ」のオープニングイベントに参加した。この展覧会では、ジェンダーの問題に取り組み、コミュニティの構築を目指す6つのアート・コレクティブの活動が紹介され、多様な芸術表現を通して社会におけるジェンダー課題と向き合う試みについて理解を深める貴重な機会となった。

その後会場を移して行われたワークショップでは、「Crises and Environment History」をテーマに、スタヴァンゲル大学の大学院生がモデレーターを務め、3つのセッションを実施した。各セッションでは参加者が活発に意見を交わし、現代における環境危機について、学際的な観点に加え、日本とノルウェーという異なる地域的・文化的視点から多角的な議論が展開された。本学からはシーダー教授と結城教授がコメンテーターとして参加し、討議をさらに深める洞察に富んだコメントを寄せた。

本ワークショップを通じて、スタヴァンゲル大学と本学との交流は一層強化され、環境人文学における国際的協働の可能性が広がる有意義な機会となった。

Online Talk #22 (11 May 2024)

「耳のために書く——（擬似）風景論」

野田研一（立教大学名誉教授）

文学作品における風景表象は、自然環境を作家や作品がいかに認識し記述しているかを考える際の重要な手がかりのひとつである。とりわけ文学の近代にとって、風景記述は決定的な役割を担ってきた。風景を描くことは近代文学の近代性を指標すると言っても過言ではない。その問題を「言語風景論」という概念を通じて考えてきたが、その場合、欠くことのできない要素が遠近法の問題である。〈風景〉という概念そのものが本質的に遠近法を前提としていることを改めて考察しない限り、「言語風景」を読み解くことはできない。

いっぽう、近代文学は〈風景〉という概念を解体する脱風景論、反風景論をもとりわけ20世紀以降展開してきた。それはいうまでもなく遠近法解体の試みでもある。この遠近法解体の試みを考えるために、本発表では、石牟礼道子『苦海浄土』と大岡昇平『野火』、それぞれの風景を対象として検討したい。副題で示しているように、この2作品の風景の本質は「（擬似）風景」なのではないか。すなわち近代文学の風景を基本的に規定している〈風景〉という概念を解体する試みとして位置づけられるのではないか。こうした問いを提起する予定である。

Book Discussion #4 (8 June 2024)

佐藤泉『死政治の精神史』

佐藤泉（文学部日本文学科教授）・結城正美（文学部英米文学科教授）

本フォーラムメンバーの佐藤泉教授に、著書『死政治の精神史——「聞き書き」と抵抗の

文学』（青土社、2023年）についてお話いただき、コメンテーターの結城教授および参加者と本書についてディスカッションを行った。

「もし今、人文学を再発明するというなら、近代的自我なり自己決定の主体なりがそれでも理性だけで生きているのではなく、まちがいなく身体をもっていること、ゾーエーの生に支えられていることを肯定することが課題となるのではないのでしょうか」という序文の一節からも明らかなように、本書は環境人文学という人文知の再調整において示唆に富む。以下は、佐藤教授による著書紹介である。

2015年にスベトラナ・アレクシェーヴィチがノーベル文学賞を受賞し、日本においても森崎和江や石牟礼道子らによる「聞き書き」の文学が注目された。本書では「聞き書き」の文学の可能性をさらに深く考察することによって、現代の諸問題を解きほぐすための手がかりを探る。

「聞く」という受動的な行為と「書く」という能動的な行為を融合させた「聞き書き」の言葉は、自己と他者との自明な境界を引き直し、さらには自然と他者に対して支配をもくろむ技術合理的主体という主体概念とは異なる人間と自然の思想を提示することにつながる。

「聞き書き」の作者、森崎和江は植民地期の朝鮮に生れ、その風土を糧として育った。彼女の日本語の肉の部分は朝鮮の人と風土に根ざしており、「完全な日本語」という仮象を基準にするなら「欠如」の日本語ということになる。しかし「欠如」を「さわやかな欠如」ととらえる森崎は、たとえば朝鮮人でありながら日本語を使う在日二世といった別の欠如を抱える他者との間の衝突を通した連帯を構想した。

また森崎は、日本語が暗黙のうちに男性の言語体系であることに深い悲しみを抱いていた。彼女は妊娠した時、一人称単数の「私」という語に強い違和感を感じたという。そして誕生・出産という生の始まりの出来事を、母親が「産む」と言うか、そうでないなら赤ん坊が「生まれる」と言うか、いずれにせよ一体不可分の出来事が二つの異なる主体の間で引き裂かれることに納得できない想いを抱いた。つまり女性身体を経験を語る言葉が日本語には決定的に不足しているというのである。

生の始まりを語る言葉が欠けているばかりではない。人は意に反して痛み、老い、死にゆく脆い身体を持っているが、にもかかわらず、日本の文化はその事実に向き合うことができていない。脆弱でままたまらない身体は自己自身で管理しつくすことができず、他者のケアを必要とするが、自律した個人という形象はそのことを思考の死角に沈めてしまうのだ。さらに現代的な新自由主義的統治の下で、人は「自己責任」の主体へと誘導され、国家にも他人にも寄りかからない「自助」の主体であることを強えられる。自ら処理できない身体＝死体は、こうした強い個人という像の限界、残余を指し示しているのである。「生」や「死」のあり方が暗黙のうちに政治化されるという点に、現代という時代の一つの特徴があるが、

森崎らの「聞き書き」の言葉から浮かび上がるのは、その明白な限界だっただろう。

Online Talk #23 (29 June 2024)

“Ocean Thermal Energy, Art, and Science: Notes from the Field”

Aster Hoving (PhD student, University of Stavanger)

At the edge of the sea stands a weathered machine, about the size of a family home. Its red, white, and blue pipes are covered in rust. This Ocean Thermal Energy Conversion (OTEC) facility was constructed by the prefectural government of Okinawa on Kume Island to showcase the possibilities of a kind of energy that can only be generated around the equator, because it requires a stable difference between warm surface water and cold deep-sea water. On Kume Island, electricity is only one part of the story to be told: the cold deep-sea water drawn in through a pipe extending far and deep out into the ocean serves to sustain a complete blue economy. Fish, algae, drinking water, cosmetics—all can be produced safely and sustainably, I am told, from deep-sea water. In this talk, I will share initial impressions and observations from my fieldwork at the OTEC demonstration facility. Furthermore, I will discuss ideas about how to analyze a technical object such as this facility from a critical environmental humanities perspective through an analysis that interrogates the overlaps and contestations between ocean energy, art, and science in Okinawa.

Online Talk #24 (13 July 2024)

「始原の場としての沼地」

伊藤毅 (東京大学名誉教授)

都市建築史の立場から大地を眺めると、「沼地」という場あるいはそれを取り巻く環境が示唆する論点は魅力的である。沼地は陸と水の間形態であり、排水して干拓すれば陸地になるが、水に満たされればふたたび沼に戻る。

近代以降の都市は、沼地という曖昧で不快な環境を忌避し、これを埋め立て、陸地化することに邁進してきた。そして建築は、拠って立つ土地にさしたる疑いも挟まず、大地は永続するものとして造られ続けた。しかし大きな自然は小さな人為環境をいとも簡単に沼地へと戻してしまう。

世界の古い起源をもつ都市を見渡すと、多くの都市は陸と水の出会う両義的な場に建設された。われわれの住む都市の始原としての沼地について、ささやかな話題を提供し、文学的なトポス論との交流を期待したい。

Online Talk #25 (14 September 2024)**「風味表象と環境美学」**

三浦哲哉（文学部比較芸術学科教授）

ひと皿の料理は、風味 (flavor) を媒介し、外部の自然環境や文化的蓄積を表象 (represent) する。広く知られていることであり、近年、世界無形文化遺産に認定された「和食」の根本理念でもある。ところで、ここでいう「表象」にはどのような根拠があるのか。「情報を食べている」だけではないと言えるのはどうしてか。どこから先は（恣意的な）「想像」になるのだろうか。「環境」を美的に享受する態度へいかに寄与しうることなのか。

本発表では、神経生物学者のゴードン・M・シェファード、精神科医の中井久夫、哲学者のミシェル・セールによる、風味や匂いを主題としたテキストを参照しながら、上述の問いについて考察し、「風味表象」を再考する。

また、私が映画研究者でありながら食と風味を考察の対象としているのは、2011年の原発事故が一つのきっかけである。食をめぐる「科学的認知」と「知覚」と「想像」はときとして混線を起こし、誤った認識をもたらしもする（疑似科学やアンバランスなスピリチュアリズム）。食文化におけるこの三者の適切な協働のありかたはどのようなものかを批判的に考えたい。

Book Discussion #5 (21 December 2024)

レベッカ・ソルニット『オーウェルの薔薇』

人間と環境の関係をめぐって旺盛に執筆活動を展開しているレベッカ・ソルニットの『オーウェルの薔薇』（川端康雄・ハーン小路恭子訳、岩波書店、2022年）を取り上げ、コメンテーターの松井優子教授と麻生えりか教授とともに議論した。

「オーウェルの白い薔薇？」 松井優子（文学部英米文学科教授）

レベッカ・ソルニットの『オーウェルの薔薇』（原著 2021 年刊）によれば、ソルニットがウォリントンのコテッジで見つけたジョージ・オーウェルゆかりの二本の薔薇の木は薄ピンクやサーモンピンクの花をつけており、のちにソルニットがその墓前を訪れたときには一本の赤い薔薇が花を咲かせていたという。赤い薔薇はイングランド国花や労働党のシンボルなど多様な意味を持つ。一方、同じくソルニットの著書には、エリック・ブレアの祖先がスコットランド低地地方の出身で、オーウェル自身、最晩年をインナー・ヘブリディーズ諸島のジュラ島で過ごし、代表作『一九八四年』（1949）の執筆もここで始めたことが記されている。そのスコットランドでは、高祖父ブレアが貴族と縁を結んだ 18 世紀半ばにはジャコバイト蜂起との関連で、そして、オーウェルが執筆活動を展開していた 20 世紀前半には権限委譲との関係で、白薔薇に特別な意味が賦与されるようになっていた。ここでは高祖父への言及

がある第5章とジュラ島での生活について扱われている第7章を中心に、ソルニットがこの評伝で提起しているオーウェルと土地や抵抗の問題について、スコットランドの視点からとらえなおしてみたい。

「戦争に抗う「時間」と「薔薇」 麻生えりか（文学部英米文学科教授）

ソルニットは『オーウェルの薔薇』において、「戦争や不況が続く悲惨な時代を生きたオーウェルは、自ら戦場に身を投じて戦い続けた社会主義者である」という固定化された「オーウェル的な」作家像とは全く別の、小動物や花や樹木を愛して未来に希望をつなぐオーウェルの姿を私たちに見せてくれる。

本レポートでは、ソルニットが本書で提示するさまざまな魅力的なテーマから「時間」と「薔薇」を選び、それらの対極にあるとされる「戦争」との関係を考えてみたい。人間よりもはるかに長い生命を有する樹木の「サエクルム (saeculum)」は、短いスパンでしかものを考えられない人間たちに、もっと深く長く環境と関わり合うことの喜びと豊かさを教える。また、美やくつろぎ、内的生活の象徴であるともいえる薔薇は役に立たず余分なものに見えるがゆえに、人間にとって欠くべからざるものである。

ソルニットは、「重要な点で[オーウェルは] モダニストではなかった」(118)と述べるが、モダニストもオーウェルと同じく時間と薔薇を重要視しつつ戦争に抗っていたことを、モダニストであるヴァージニア・ウルフの小説『ダロウェイ夫人』(1925)を例に考えてみたい。ソルニットが考える「オーウェル的な」と「ウルフ的な」ものは、従来はかけはなれていられると思われてきたが、2人の距離は案外近いといえるかもしれない。

Online Talk #26 (13 January 2025)

木村友祐『猫と考える動物のいのち』著者によるトークと対談

木村友祐（作家）・結城正美（文学部英米文学科教授）

12月5日に刊行された『猫と考える動物のいのち』（ちくまQブックス）は、中高生を対象とする読みやすい本で、半日もあれば読めてしまうだろう。とはいえ、読後もずっと考えてしまうような濃密な内容である。この本には、木村氏がこれまで小説を通して深めてきた思索が詰まっている。

オンライントークでは、まず著者の木村氏に『猫と考える動物のいのち』についてお話しいただき、続いて、結城教授との対談形式で、人間とノンヒューマンの関係や、モア・ザン・ヒューマンをめぐる言語など多様な斬り口から、『猫と考える動物のいのち』について語り合った。なお、当日の録画は、フォーラムのウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> にアップロードし公開した。

Online Talk #27 (1 February 2025)

「アイルランド《風景詩》に見る、「重層化された景色」と「心の眼」: Seamus Heaney と W.B. Yeats の詩作から」

伊達直之（文学部英米文学科教授）

アイルランドの20世紀詩は、脱植民地から植民地後への政治が日常の生活に浸透した時代に書き継がれた。生活世界と風景の上には、土地所有、産業経済、国境問題の歴史があまねく刻み込まれている。こうした歴史環境の中で、「アイルランドを代表する」とされてきた二人の詩人をとりあげ、詩人たちが自然をどのように作品中に表現していたかに着目し、彼らの自然描写の方法と効果、その意図と独自性を探る糸口を見つけていきたいと考えている。

2024年度の主な活動は以上のとおりである。他に、年度末にメンバー対象のオンラインミーティングを行い、活動を振り返るとともに今後の計画について話し合った。なお、AGU 環境人文学フォーラム開始以降の活動と関連情報は、ウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> で公開している。